

主 題：キリストを中心とする働き②

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章 25－27節

テーマ：私たちが見做すべき“働き”におけるパウロの態度とは？

先週から私たちは、キリストを中心とする働き、特にパウロの働きに見られる模範を、コロサイ 1：24－29から考え始めました。その続きを今回も一緒に学びます。きょうは25－27節を中心に考えたいと思いますが、いま一度24節からお読みしますので、それぞれよく神様のことばに目を留めてみてください。

コロサイ 1：24－29

「：24 ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。：25 私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。：26 これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現された奥義なのです。：27 神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。：28 私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。：29 このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。」

さて、私たちは今、キリストの福音に仕える者となったパウロの姿から、私たちが模範とすべき、見做すべき五つの態度を学んでいます。主に喜ばれる働きを実際に成していたその人物の歩みから、どうすれば私たち自身がますます主に喜ばれる働き人へと成長できるのかを改めて考えています。そして先週、私たちは五つあるうちの最初の態度を見ました。

○キリストを中心とする働き：模範とするべき五つの態度

1. 働きに伴う結果を喜んで受け入れること 24節

一つ目の態度は「働きに伴う結果を喜んで受け入れること」でした。思い返してみても、パウロの働きには文字通り困難があふれていました。キリストのために忠実に働いていこうとする中で、彼は数え切れないほどの苦しみを味わっていました。彼を憎む者たちから迫害されて、牢に入れられ、石打ちに遭って死にかけたことも何度もあったのです。普通に考えれば、置かれたその状況は、到底喜んだり希望を見出せるようなものではありませんでした。でも、そんな状況にあってなお、パウロは大いに喜び、神様に感謝することができたのです。いったいどうしてか？それは自分の受ける苦しみが何よりもキリストのためであるということ、またその苦しみがただ苦しみで終わるのではなく、福音の前進に繋がるのだと彼が知っていたからでした。パウロはいつも、自分がだれのために苦しんでいるのかを正しく捉えていました。だからこそ、どんなときも働きに伴う結果を喜んで受け入れることができたのです。そんな態度こそ、主に仕えていく私たちひとりひとりも見做すべき一つ目の態度でした。

2. 自分にゆだねられた務めを覚えていること 25節

続けて、パウロの働きに見られる二つ目の態度を考えてみましょう。私たちが模範とすべき二つ目の態度は「自分にゆだねられた務めを覚えていること」です。改めて25節を見てください。このように記されていました。「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりま

した。神のことばを余すところなく伝えるためです。」と。ここで皆さんに注目してほしいことばが三つあります。非常に大切なことをパウロは示してくれていました。

1) 「神から…教会に仕える者となりました」

まず一つ目に彼はこう言っていました。「私は神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。」「神から…教会に仕える者となりました」と。自分の務めが神様からゆだねられたものである、ということパウロはよくわかっていました。教会に仕える者となったのは、彼の選択ではありませんでした。彼自身が強く望んだからそうなったのでもありません。彼を仕える者としたのは、ほかのだれでもない神様だったのです。こうしてパウロは、自分に務めを与えてくださったお方がいったいだれなのかを正しく覚えていました。それが証拠にパウロは繰り返しそのことを口にします。私たちが聖書を見ていけば、そんな彼の姿を何度も見て取ることができます。例えば、アグリッパ王様の前に立って弁明した時もそうでした。パウロは自分自身の身に何が起きたのかをはっきりと王様の前でこのように証したのです。使徒26：12-16にこう記されていました。「：12 このようにして、私は祭司長たちから権限と委任を受けて、ダマスコへ出かけて行きますと、：13 その途中、正午ごろ、王よ、私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と同行者たちとの回りを照らしたのです。：14 私たちはみな地に倒れましたが、そのとき声があって、ヘブル語で私にこう言うのが聞こえました。『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。』：15 私が『主よ。あなたはどなたですか』と言いますと、主がこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。：16 起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。』」と。思い返してみれば、かつてのパウロはイエス様に仕えたいなどというそんな願いや思いは、一切持っていませんでした。教会に仕えるということなどもってのほか、彼にとってクリスチャンたちはただ忌み嫌う迫害すべき対象でしかなかったのです。だからこそ、激しい怒りに燃えていた彼は彼らを迫害する権限を祭司長たちから受け、その目的のためにダマスコへと向かっていました。しかし、その道中でイエス様に会った彼は救われ、完全に換えられました。教会を滅ぼそうとしていた者が、教会に仕える者に入れられました。キリストを迫害し続けていた者が、キリストを宣べ伝える者とされたのです。彼が望んだからそうなったのではありません。ただ神様がパウロを救い、ただ神様がその務めに任じられたのです。同じことをパウロは別の箇所でもこう述べていました。ローマ15：16にも「それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。…」また1テモテ1：12-13にもこう書いています。「：12 私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。：13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力を振るう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。」と。パウロは、自分の務めはただ神様からあわれみのゆえにゆだねられたものなのだとわかっていました。パウロは、主に仕えるという働きを自分で勝ち取ったものなどとは決して思っていませんでした。それが自分に当然値するものだとも、みずからが進んで選択した結果だとも考えてはいませんでした。いや、むしろ神様をけがす者として生きていたそんな自分には決して値しないものなのだと捉えていたのです。こうしてパウロは、福音や教会に仕える働きは、ただ恵みによって与えられた特権なのだとわかっていました。それが神様からの特別な務めであるのだと覚えていたのです。

2) 「ゆだねられた務め」(ギリシャ語：オイコノミア=オイコス「家」+ノモス「管理、規則」)

またこれに加えて、パウロは神様から託されたその務め自体に関しても正しい捉え方をしていました。25節に「神からゆだねられた務め」とありますが、二つ目に注目してほしいことばは、この「ゆだねられた務め」ということばです。これは興味深いもので、元々のギリシャ語には“オイコノミア”と

いうことばが使われています。このことばは「家」を表す「オイコス」と、「管理や規則」を表す「ノモス」ということばが引っ付いて成り立っていて、二つを合わせて「家を管理すること」であったり、また「そのような役割を担う人物やしもべ」などを表したりしました。そのようなことばがこの箇所でも用いられていました。これは今を生きる私たちにとってあまりなじみのないものかもしれません。しかし古代社会においては、このように主人が所有している家やその家の財産の管理を任されるような人物がいるのがごく一般的でした。主人は家のことをそのしもべに任せて、旅に出て行ったり、ほかのことを行いました。例えば、エジプトに連れて行かれたヨセフはまさにその役割を担っていました。ポティファルというパロの廷臣に買い取られたときの彼の様子が創世記にこのように描かれています。創世記 39 : 4、6にこうあります。「それでヨセフは主人にことのほか愛され、主人は彼を側近の者とし、その家を管理させ、彼の全財産をヨセフの手にゆだねた。」「彼はヨセフの手に全財産をゆだね、自分の食べる食べ物以外には、何も気を使わなかった。…」と。管理人はその家の主人ではありませんでした。だから管理人が自分の物を所有しているわけではなかったのです。でも同時に、管理人は主人から託された持ち物や財産のすべてをうまく用いて、家に住む者たちを養うという責任を負ってもしました。言うまでもなく、そのような人物には大きな信頼と責任が伴ったのです。パウロはそんな管理人としての務めをよくわかっていました。ただ神様のあわれみによって教会に仕える者となっただけではなく、彼らに語るみことばや福音のすべてを神様から管理するようにとゆだねられていることを彼は理解していました。ですから、彼は別の箇所でもこのように言うのです。例えば、ガラテヤ 2 : 7にはこう書いています。「…ペテロが割礼を受けた者への福音をゆだねられているように、私が割礼を受けない者への福音をゆだねられていることを理解してくれました。」Ⅰテサロニケ 2 : 4にもこう書いています。「私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから…」パウロは自分にゆだねられたものが何かをわかっていました。それが自分自身の所有物ではなく、ただ主人である神様が彼を信頼して神様から託されたものであるということに覚えていたのです。ですから、彼はそれを用いることに忠実であろうとしました。自分に任せてくださった主人をただ喜ばせたいと。そのようにして与えられた責任をいつも全うしようとしたのです。そのことを思えば、なぜパウロが次のようなことばを口にしていたのかもよく理解できません？Ⅰコリント 9 : 16 – 17にこう書いています。「:16 というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったなら、私はわざわいだ。:17 もし私がこれを自発的にしているのなら、報いがありましょう。しかし、強いられたにしても、私には務めがゆだねられているのです。」パウロにとって、ゆだねられた福音を語るということは、決して譲ることのできない務めでした。それゆえに、いつも彼は神のことばを余すことなく伝えようとしていました。時が良くても悪くても、たとえある人たちから愚かに思われたとしても、すべての人に忠実にゆだねられたみことばを語り続けていたのです。こうしてパウロは神様の恵みによって、管理人として、神のことばを語る務めが自分にはゆだねられていることをわかっていました。

3) 「あなたがたのために」

そして、もう一つ注目してほしいことばがあります。先ほどはあえて飛ばしましたが、25節を見るとこのように書いていました。「私はあなたがたのために」「あなたがたのために」と。これを読んで皆さんならすぐ気づかれたでしょう。パウロは同じことを一つ前の箇所でも口にしていました。24節でも繰り返し言っていました。「私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、…」「あなたがたのために」と。いったいこれから何が言えるのでしょうか？言えるのはこういうことです。パウロの務めは彼自身のためではなく、いつも神様やほかの人のためだったということです。彼の働きは、どんなときも自分中心のものではありませんでした。彼は神様から託されたものを、自分の益のために用いようとしていたのではなかったのです。パウロは、神様から託された自分自身の務めを正しく覚えていました。また何よりも、彼は自分が、だれよりもご自身を

へりくだらされたキリストのしもべであることに心を留めていました。ですからⅠコリント4：1-2にもこう書いています。「1 こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。2 このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。」と。だからこそ、パウロはいつもへりくだって忠実に神様と人々に仕えようとしていました。確かに、そのためにさまざまな苦しみや痛みを受けることもありました。迫害され、危うくのちを落としそうになることも多くあったのです。しかし、それでもなお彼は進んで自分を犠牲にして、主の恵みによって託された働きを全うすることができることを喜んでいました。ただ自分自身が満足して、ただ自分自身が感謝されて、ただ自分自身が喜ぶために成していたわけではなかったのです。そんな彼の働きは、まさに自分というものが無い、仕える者としての働きでした。

さて皆さん、ここで立ち止まって考えてみてください。これが、パウロの残してくれた模範でした。そして同じ主を愛している私たちひとりひとりも、この模範に倣って歩いていくことが求められているのです。もちろん、パウロのように使徒として今の時代に召されている人はいません。また彼のように教会を牧するというような責任をすべての人が負っているわけでもありません。でも、聖書を見れば、私たちがみなそれぞれにさまざまな働きや務めを神様から与えられている、ということをはっきりと見て取ることができます。ペテロはⅠペテロ4：10でこう言っています。「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」「それぞれが賜物を受けているのですから、」と。例外はひとりとしていません。キリストによって救われた者たちはみな、恵みによって、神様からさまざまな責任や務めを与えられています。私たちは主人に従順に仕えるひとりのしもべとして、キリストに似た者となっていくことを追い求めたり、福音を宣べ伝えてキリストの弟子をつくることを追い求めたり、与えられた賜物を用いて神様がほめたたえられるためだけに互いに仕え合うことが求められたりするのです。

そうだとするならば、改めて考えてみてください。果たして、私たちは自分自身にゆだねられた務めを正しく捉えているのでしょうか？パウロのように、だれが自分に務めを与えてくれたのかということもいつも覚えているのでしょうか？自分に与えられた働きはどんなものであろうともただ神様の恵みである、ということをおぼえてはいないのでしょうか？どうでしょう？それがどんな働きでも同じです。皆さん、私たちが家族や友人に福音を伝えていくことであろうとも、みことばに基づいて子育てをしていくことであろうとも、夫婦の間であってまた教会の中であって兄弟姉妹の益となることを求めていくことであろうとも、主のために成すそのすべての働きは私たちにとっての特権だと、本当にそう思っているのでしょうか？神様があなたに信頼して任せてくださった、ゆだねてくださったそんな務めだと、本当に考えているのでしょうか？それとも、ただ心苦しい、嫌々ながら行う義務だと思っただけではないのでしょうか？もし単なる義務のように感じているのなら、そのときはよく思い出してみてください。私たちのうちのだれも、主に仕えるという働きを自分で勝ち取った者はいません。その働きに最初から値した者もいません。むしろ、本来なら私たちはみな神様の敵として歩んでいた罪人として永遠に滅ぼされてしかるべき存在でした。しかし、そんな私たちをただ神様が恵みによって救い出してください、恵みによって神様に仕えることができるという務めを与えてくださったのです。ただ神様が、ご自身のみことばや福音を管理するようにと私たちにゆだねてくださったのです。これって凄いことだと思いませんか？少しこんな場面を想像してみてください。あるところに主人の敵として歩んでいる奴隷がいました。主人のことを忌み嫌って、主人を憎んで歩んでいる奴隷がいたのです。ある主人は、その奴隷を哀れんで代価を払って買い取り、そしてその者に「私のものを忠実に管理するように」と言って、ご自身の家のものすべてをその奴隷に託すのです。そのしもべにとってこれはどんなに感謝なことでしょう。そのしもべにとってそれはどんなに本来値しないものなのでしょう。そしてもし、そんなしもべが与えられたことを感謝もせず、与えられたものを忠実に扱おうとしないのなら、どれだけ主人を悲しませることになるでしょう。

う？皆さん、キリストのしもべである私たちにとって主のために仕えるということは、これまでも、これから先も、ただ特権でしかありません。神様は私たちにさまざまなものをゆだねてくださいました。みことばも、福音も、賜物もそうです。もっと言えば、私たちが持っている時間も、お金も、このからだも、このいのちもすべてそうです。それらは私たちが持っている所有物ではありません。ただ主から与えられた、ただ主から恵みによってゆだねられているものです。私たちは管理者です。そんな管理者に問われることは、どんなときも忠実であるかどうかです。確かにその務めには難しさを伴うこともあります。私たちが主のために働いていこうとするときに、恐れや不安が生じるような困難な場面に出くわすことも、喜びを奪われてしまうような場面に直面することもあります。自分自身を犠牲にして喜んで仕えていこうとする中で、だれからも感謝されず、むしろ傷つけられるようなこともあるかもしれません。でもそんなときこそ、自分にゆだねられた務めを思い出すことです。どんなにすばらしい特権を神様からゆだねられたのかということをおぼえて、その務めにならぬ忠実であることです。忘れてはいけません。私たちは恵みによって救われ、恵みによって神様から特別な務めをゆだねられました。そのようにして自分自身にゆだねられた務めを覚えていること、それが二つ目に模範とすべき態度でした。

3. 栄光に富んだ奥義を忠実に伝えること 26-27節

次に私たちが模範とすべき態度、パウロの働きに見られる模範ですが、三つ目は「栄光に富んだ奥義を忠実に伝えるということ」です。25節の終わりのところで「神様のことばを余すところなく伝えるのだ」と自身の務めを口にしていたパウロは、続く26-27節でその詳細を明らかにしていました。彼は具体的に何を自分が伝えるのかについて触れるのです。26-27節見てください。このように彼は言いました。「:26 これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現された奥義なのです。:27 神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」パウロが宣べ伝えようとしたもの、それは「栄光に富んだ奥義」でした。この「奥義」ということばは、パウロの書簡にもよく用いられたりするもので、簡潔に言えば、これは以前、旧約の時代には隠されていて、新約の時代になって人々に明らかにされた神様のご計画や真理のことを表しています。かつてはだれも知らないものでした。神様によってずっと隠されてきたからこそ、人にはそれを知る由もありませんでした。しかし、そんな真理を、神様ご自身がただ恵みによって、今聖徒たちにはっきりと啓示されたのです。そのような奥義にはどんなものがあるのか？例えば、その一つは、キリストの再臨やそれに伴うよみがえりでした。旧約の時代にはまだそれらは明らかにされていなかったのです。パウロはこのように宣べていました。Iコリント15:51-52にこう書いています。「:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」こうして神様の奥義が人々に明らかにされていきました。以前は隠されていたものが、明確に現わされたのです。そんなさまざまな奥義をパウロは余すところなく忠実に宣べ伝えようとしていました。

でも、パウロはただなんとなくそれを伝えていたのではありませんでした。パウロはそのすばらしさについてだれよりもわかっていたので、27節で奥義に関して二つの凄い点を宣べていました。もう一度27節を見ると、まずこのように記されています。「神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。…」と。

1) 「異邦人の間にあって」

一つ目のすばらしいことは、神様がこの奥義を異邦人の間にあって知らせたいと思われたことです。「異邦人の間にあって」と。皆さん、異邦人が含まれていたのです。ある人は、その何が凄いのかと思

われるかもしれませんが、これは考えられないことでした。少し歴史的な背景を思い返してみてください。この当時の社会において、ユダヤ人と異邦人の間には、いつも大きな隔たりが存在していました。特にユダヤ人たちは旧約の時代から、神様の救いや祝福にあずかるのは自分たちだけだと考えていたからこそ、それ以外の人たち、異邦人を忌み嫌っていたのです。彼らは神様の救いのご計画がすべての者に及ぶとは、一切考えていませんでした。自分たちだけが選ばれた民なのだということを、ずっと誇り高ぶっていました。だからこそ、ペテロがカイザリアに住んでいたコルネリオという人物のもとを訪ねて異邦人の彼にも聖霊が下ったとき、その知らせを耳にしたユダヤに在る兄弟たちは、それを良く思いませんでした。彼らの様子がこのように記されています。使徒 11 : 1-3 「:1 さて、使徒たちやユダヤに在る兄弟たちは、異邦人たちも神のみことばを受け入れた、ということに耳にした。:2 そこで、ペテロがエルサレムに上ったとき、割礼を受けた者たちは、彼を非難して、:3 「あなたは割礼のない人々のところに行って、彼らと一しょに食事をした。」と言った。」と。非難しました。彼らもわかっていませんでした。これまでの習慣に基づいて、神様の救いは異邦人のものではないと考えていたのです。またペテロのときだけではありません。パウロのときも同じでした。怒りに燃えているユダヤ人たちとパウロとのやりとりがこのように描かれています。使徒 13 : 44-46、50 「:44 次の安息日には、ほとんど町中の人々が、神のことばを聞きに集まって来た。:45 しかし、この群衆を見たユダヤ人たちは、ねたみに燃え、パウロの話に反対して、口ぎたなくののしった。:46 そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。」

「:50 ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出した。」と。ユダヤ人は神様の真理がわかっていませんでした。そして、間違いなくそんなユダヤ人と異邦人の間には大きな隔たりが存在していたのです。かつての異邦人たちは、除外された者でした。でもそんな異邦人が、今は含まれました。神様の救いのご計画がはっきりと明らかにされたとき、彼らも救いへと入れられたのです。ただ神様の恵みによって信じるすべての者に救いが与えられました。パウロはそのすばらしい事実をこう宣べています。エペソ 3 : 3-6 「:3 先に簡単に書いたとおり、この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。:4 それを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよくわかるはずです。:5 この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。:6 その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。」と。これが、明らかにされた奥義でした。旧約の時代はだれも、イエス・キリストを信じることでユダヤ人と異邦人が一つとされ、一つのからだに属するようになるなどとは思いませんでした。でも今は、福音により、キリスト・イエスにあって、ユダヤ人も異邦人もなくなったわけです。どんな国籍やどんな民族であろうと、どんな文化やどんな背景を持っている者であろうと、同じ主によって救われ、一つとされました。

そしてこれは、何より異邦人である今の私たちにとって最高の喜びをもたらしてくれるのです。確かに私たちを考えてみても、今も私たちの間にもいろんな違いは存在しています。でもそんな違いに関わらず、私たちは同じ信仰によって一つのキリストのからだに属する者となったのです。同じ主を愛する一つの神の家族として、互いに愛し合うことができるのです。そのことを考えれば、この奥義はどれほど栄光に富んだものなのだろうかと思いませんか？でも、これだけが凄いことではありませんでした。

2) 「あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望み」

二つ目にすばらしいことが、その続きにこう記されています。よく見てください。27節の後半部分に「この奥義とはあなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」と。「あなたがたの中におられるキリスト」これはいったいどういうことでしょうか？これも旧約の時代を振り返ってみれば、確かに

その当時から「救世主が後にやって来られる」ということは何度も預言されていました。もちろんそのことをユダヤ人たちもよくわかっていました。いや、むしろ彼らはだれよりもその救い主を、メシアの誕生を待望していた者たちでした。でも、彼らはあることを知りませんでした。それは、そのようにやって来られるその救い主が、ただ来られるだけではなくて、すべての信仰者のうちに永遠におられるようになる、ということでした。救われた者のうちに聖霊なる神様が内住してくださって、いつもキリストがそのうちに生きておられるということ、その真理を知らなかったのです。そしてこの真理こそ、隠されていた偉大な奥義でした。これを考えても、これも今の私たち自身が喜びを見出すことのできるすばらしい神様の約束でした。パウロもわかっていました。ですから彼もこう言うのです。ガラテヤ2：20「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」と。これが、救われた者の新しい姿でした。私たちの新しい姿でした。皆さん、キリストが私たちのうちに生きておられるというわけです。考えてみてください。かつて敵として歩んでいたそのような者のうちに、今も悲しいことに罪を犯してしまうそのような者のうちに、主がいつもともにいてくださるのだと。しかも、この方はただのお方ではありません。このお方はすべてを造られ、すべてを支配され、すべてにおいて第一であられるお方、すべてにまさるその御子が、私たちのうちにいてくださるというわけです。それはなんと凄いことでしょう。

でも、それだけでもありませんでした。続きにこう書いていたのです。「…あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」と。「栄光の望み」とは何のことでしょう？簡潔に言えば、すべての信仰者がイエス・キリストと永遠をともにする日がいつか必ずやって来る、というその望みです。キリストがうちにいて、キリストと一つとされているからこそ、その者は天国に入りいつまでも主とともに過ごすことができるという、そんな最高の特権にあずかることができるのです。皆さん、こんな場面は実際にはありえないことかもしれませんが、これもちょっと想像してみてください。ある日、私たちが王様に招かれて、王様と一緒にある食事会場へ向かっているとします。そして何も持たず手ぶらでその会場に到着した私たちは、王様の後に続いてそこに入ろうとするのです。すると、そこにいた警備員に呼び止められます。「いやいや、あなたはここには入れません。」と。でもその時に王様が振り返って言うのです。「そのまま通しなさい。その者は私と一緒にだから。」と。するとその瞬間、どうなります？状況は一瞬にして変わります。なぜですか？それは王様と一緒にだからです。ただ王様との関係が、私たちが会場に入ることを可能とするのです。皆さん、これと同じような関係を、私たちは今キリストと持っているのです。いつの日か私たちが天に入ることができるのは、何かそれに値する対価を私たちが持っていてそれを差し出したからではありません。もちろん、私たちが何か喜ばれるようなことをしたから、だからそこに入れるのでもありません。そこに入れるただ一つの理由、それは、ただ愚かな罪人であった私たちが神様の恵みによって救われ、イエス・キリストと一つとされたからです。十字架の死によって代価を払って買い取ってくださったそのキリストが私たちのうちにいてくださるから、今私たちはこの方において永遠の望みを持つことができるのです。これこそ、私たちに与えられた揺るがない希望でした。これこそ、神様が明らかにしてくださった「栄光に富んだ奥義」だったのです。だからこそ、パウロはこのようにすばらしい奥義を余すところなく宣べ伝えようとしていました。唯一の救いを、唯一の希望をもたらすことができるそんな神のことばを人々に忠実に伝えようとしていました。彼にとって、こんなにもすばらしい真理をだれかに伝えないで黙ったままにいるなどということではできなかったのです。これが、パウロが残してくれた模範でした。

そうだとするならば、果たして私たちは、パウロのように神のことばを今伝えようとしているのでしょうか？キリストにあってのみ救われ、キリストにあってのみ揺るがない将来の希望があるのだと、そう忠実に語っているのでしょうか？ある人はこれを聞いて思うかもしれません。…私には難しいです。何を語

ればいいのかわかりません。うまく言えないかもしれません。私はパウロのように強くはないです。もしそのように思うなら、パウロの模範を忘れないことです。パウロが忠実に働くことができたのは、何も彼が特別な力や知恵を持っていたからではありませんでした。彼は、彼自身の力に拠り頼んで主の働きのすべてを成そうとしていたのでもありませんでした。次回また詳しく考えますが、続く29節で彼はこう口にしています。「このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。」と。パウロの力の源、それは、いつも彼のうちに働くキリストの力でした。彼は自分自身のうちにおられる偉大なキリストの助けにただ拠り頼んでいたのです。もしかしたら私たちが難しいと考えるときは、私たちが自分に一番拠り頼んでいるときかもしれません。パウロにとって、自分を強くしてくださる方で十分でした。そして皆さん、感謝なことは、その同じ主の力に今私たちも身をゆだねることができるということです。私たちが罪から救ってくださり、いつも私たちのうちに生きておられる愛する主イエス・キリストに拠り頼みながら、私たちも与えられたさまざまな務めを果たしていくことができるということです。そうだとするなら、栄光に富んだ奥義を、唯一の救いを、唯一の希望をもたらすことのできるそのキリストの福音をともに大胆に宣べ伝えていきましょう。主人であられる神様の前に、「よくやった。忠実なしもべよ。」と言われる日を楽しみにしながら、今ゆだねられているその務めにともに忠実に歩いていきましょう。